



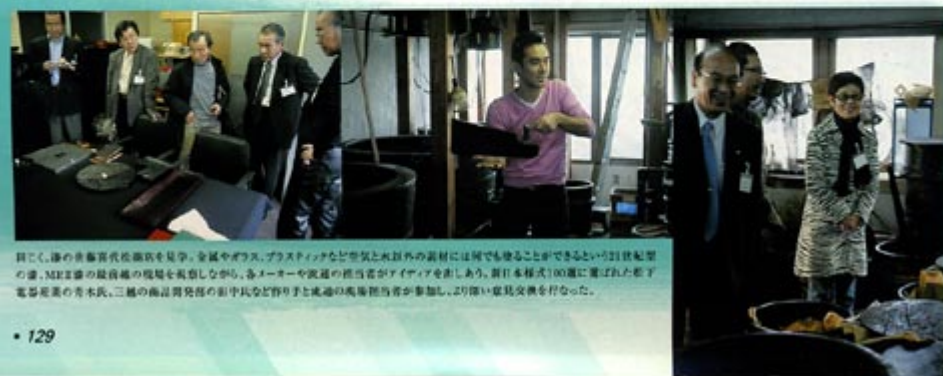
前日本様式学務局長
内藤真保氏
1962年松下電器産業入社。電気電
子関連の海外部署を経て、2006年1
月新日本様式協議会発足と同時に
事務局長に就任。'07年3月18日にはフ
ランス・パリ商工会議所、日仏経済交
流委員会と共同イベントを行う予定。
現在、その準備で渡日中の毎日。「新
日本様式」協議会のHPは、
www.japanesque-modern.org



会場となった京都国際ホテルを会場にして日開ワ
ークショップが開催。エントランスには、京友禅アロ
ハ(PAGON)ほか京都からの参加企業のアロハ
グッズがディスプレイされた。新日本様式100選に選ば
れたサントリー「緑茶 伊右衛門」、このアロハマ
ルキーパーや中古人気によるプレゼント、また京都の
茶屋企業からは、手紙がのびのびのメールとコラボ
したサーフボードに京友禅がプリントされた視覚を発売、サ
ーブルを囲んで参加企業がコラボを発表し、あい、日
開のアロハではサントリーの発表が行われた。



Canon、三菱鉛筆、パナソニック、TOYOTAなど企業のデザイ
ナーと京都の伝統産業の作り手のセッション。実際にモノづくりが
行なわれている現場を視察。京和傘の匠の技を話して照明器
具を作る日吉原を訪問。西原氏と意見交換を行ないながら、コ
ラボレーションの可能性が図られた。



同じく、漆の美術品代産品を見学。金銀やガラス、プラスチックなど多岐にわたる素材には何でも使えるという12世紀型
の漆、MEB漆の最終産品の現場を見学しながら、各メーカーや関連の担当者が見学を企画し、新日本様式100選に選ばれた漆
器産業界の青木氏、二越の商品開発部の前中氏など作り手と産地の現場担当者も参加し、2時間意見交換を行った。

Made
in
KYOTO

新芸呑叩のデザイン

第32回

新日本様式 京都ワークショップ

ついに全額が終了。ここ数年、
僕が京都で取り組んできたモノ
づくりにおける伝統とモダン
の結びつき、それらを融合し
たアロハが、今度は最新技
術をもった大手メーカーや実
業と組むという形に活用さ
れ、異なる展開にドライブが
かかることになったのだ。

新たなムーブメント

ある日、古くからの知人と
ぼつたり再会した。その知人は
「新日本様式協議会のアロハ
ネットの運営委員になってた
ぞ」とも、この新日本様式協
議会とは何か、それは、元小
泉首相のもと、日本ブランド戦
略の策として魅力ある日本
を海外に発信すること目的
に、日本の伝統文化をもとに
して、今日のデザインや職人
を取り入れて現代生活に相応
しいモノづくりを提言してい
ろ、という趣旨の団体だ。

協議会の構成員には、メ
ーカーや流通などの法人から
個人までさまざま。この新
日本様式協議会の調査研究の活動
の第一歩として、協議会委員
業と産地の伝統産業がワー
クショップを開き、直視的な交流

をもつことで、新商品開発や
クリエイションができないが
模索する場として、京都が
選ばれたのだ。そこで僕もナ
ビゲーター役として参加す
ることになった。

たとえば、以前に紹介した
京友禅とアロハのコラボ
ができた京友禅アロハ
「PAGON」や和傘で健
念をほしめとする衣丸位を
テーマにした京のミニタの
アロハなど、時には京都職
工会議所主催によるマナーサ
イタの観点でアドバイスも、
時には京都ブランドの作り手
の産産を講演会形式で行な
っていくという。

モノはその作りの技やギ
ャイン、流石、それが物影に
照らされて初めて産品として
の中で認められる。その産
品を作る産地において、今回の京
都ワークショップが大きな意義
をもつて僕にはある。

京都ワークショップ

昨年11月20日、12月1日の
2日間、京都市中区の京都
国際ホテルにて、参加者は京

伝統と革新が同居する街、京都。
どの時代も古い風習を打ち破り、そして新しい文化を生み出して来た。
習俗に入り、伝統的な技法を活かしながら、
革新的かつアヴァンギャルドに活躍し始めるみやこびとこびとが
そんなモノづくりを興る、彼らの生みの苦しみと喜びをクロージングする。

都のモノづくりに携わる企業
や個人として東京や全国各
地の会員企業のデザイン監
査者や関係担当者ら約50
人、早稲田講義形式で5日
は、参加者が積極的に意
見を交換しあい、実際にモノ
作りをしている現場に足を
運んで見学する、という体
験型のプログラムに仕立て
たのが今回の特徴だった。

新日は参加企業からのプレ
ゼンテーション。サントリーから
は和傘とコラボして世の中
に送り出した「緑茶 伊右衛門」
のブランドマネージャーの沖
中直人氏が参加した。また
後から開発ストーリーが解
説され、その間に京都産
品からは手紙、アロハ産の
産産代産品、京和傘の日
吉原がプレゼンをした。

今後の取り組みと課題

新日は東京や全国から参加
の会員企業のメンバーがそれ
れ6、7人までのグループに分れ、
和傘や漆の作業現場に足を運
び、それぞれの製作過程やア
ロハを見ながらどんなコッ
ラボが可能かを実際に自分たち
が目で見学して感じ、その可能

性を探った。そして締めくく
りはパネルディスカッション。僕
もパネルとして参加し、モノ
作りの現状報告と今後の課題
について議論を行なった。

「これを継続していくことが
大強手強手から出ていけ
ない。変態のせいで得られた
「日本人があれかきつけた人
など、さまざまな意見が飛び
出した。モノづくりにおいて
的の産の旗は、一歩も無れない
けれども、スチールドレスが
「アロハ」を同じ、加の旗を
行なうこと。それが10に
100に1000に1000に1000に
がりもたらせることができる。
今日も結びつけよう。とて
同様に結びつけよう。とて
も右の旗を打たせろ。とて
日本人として生まれて、モノ
づくりの12世紀の日本の様式
をもつとも、限りなくモノ
に限定している人の役に立ち
たい。僕は改めて感じたのだ。

【文】島田昭彦

産産が産産に生まれ、未来は
産産に産産に産産に産産。現
在、産産に産産に産産に産産
「PAGON」など、京都の産
産に産産に産産に産産。産
産に産産に産産に産産。産
産に産産に産産に産産。産
産に産産に産産に産産。産
産に産産に産産に産産。産